

# 愛媛の女性<sup>ひと</sup>16

俳人 夏井いつきさん

取材・文 編集工房インデクス  
撮影 畑中正司

## 俳句って、ほんとはもつと面白い。



〈プロフィール〉俳人。1957年、南宇和郡内海村生まれ。京都女子大卒業後、中学校の国語教師のかたわら、独学で俳句を学ぶ。黒田杏子（ももこ）主宰「藍生」創立当初からのメンバー。平成6年、第8回俳壇賞受賞。平成12年、第5回中新田（なかにいだ）俳句大賞受賞。俳句集団「いつき組」組長、月刊「子規新報」、文芸誌「ぼあん」編集委員、松前町教育委員。著書に「それ行けミーハー吟行隊」「子供たちはいかにして俳句と出会ったか」「絶滅寸前季語辞典」など。雑誌、新聞、講演、ラジオ、テレビなどでも活躍中。松山市在住。

俳句は「年寄りができるもの」というイメージを壊したくて……と夏井さん。百年前、子規が仲間たちと夢中で俳句をやっていたように、若者たちの身近な文芸にしたい。俳句を高質な文学ではなく、面白いものだと思わせたい、と持ち前の明るさとパワーで各方面に働きかけてきた。

なかでも熱心に取り組んできたのが、「俳句甲子園」だ。「俳句甲子園」は、俳句を通じて地域間・世代間の交流と若者の文化活動の活性化をはかろうとする高校生の大い。俳句の都から全国に向けて発信する文化イベントとして開催に取り組んできたが、さまざまな障壁があった。

それを乗り越えるために必要だったのが、俳句の楽しさを「知ってもらおう」ための草の根運動だ。幅広い年齢層に俳句本来の面白さを浸透させる俳句の種蒔き活動の傍らで、俳句の実力を高めるべく仲間たちと切磋琢磨を続けている。

子規や多くの俳人を輩出した「俳句王国愛媛」で、挑戦し続ける夏井さんだが、不思議とこの人の周りには笑いが絶えない。



俳句手帖を片手に、三々五々遍路道を歩き、ペンを動かす。

## 吟行句会の楽しみ

夏井さんは、俳句のプロである。プロということは、それで生計を立てているということだが、これほど忙しい人だとは思っていなかったの、スケジュールを聞いたときは正直驚いた。そして一番近い吟行ということで、取材させてもらったのが、久万の古岩

屋で行われた「いつき組」のウィークデイ吟行。若葉の美しい季節。木漏れ日を浴びながら、午前中に吟行し、午後からは場所を変えて句会となった。句会では匿名の句から気に入ったものを選ぶ選句をし、選んだ人はその句の良いところを述べるのだが、「この季語の使い方はどうでしょう」「この言葉がもし他のものだったら」と、夏井さんの鋭い批評と指摘が次々と繰り出され、ある人はうなずき、ある人は自説を主張する。その、息もつかせぬ応酬に頭脳はフル回転し、緊張感は陶酔感へと変わり、座をとにもすることで不思議な連帯感も生まれてくる。俳句の門外漢にも、これが子規の尊重した匿名ゆえの平等さと楽しさなのだ、納得でき

た。



## 黒田杏子の弟子に！

夏井さんが、幼い頃からの文章に対するひそかな思いを噴出させ始めたのは、中学校の新米国語教師として参加した宴会の席だった。懇親会の幹事を任せられ、座席決めのために俳句でくじ引きを作ったのだという。それが好評で楽しんで作るようになり、俳句

に足を踏み入れることになった。

当時、句会の存在も結社の存在も知らなかったが、本屋で立ち読みした俳句雑誌の作品が夏井さんを捉えた。黒田杏子の句であった。俳句では、「季語の現場で季語と交信ができるのだ」と衝撃を受けた夏井さんは、その日以来「私は黒田杏子の弟子になる」と一方的に師事することを決めた。総合誌で黒田杏子選の投句欄が始まると、初回から投句を続けた。

結婚をし、子どもが二人生まれた。教師の仕事は天職と思えるものだったし、生徒も好きだった。しかし、家庭の事情で教師を辞めなければならぬ思わぬ事態となり、その時の自分を納得させるために

編み出したのが、「仕事は辞めるけど、俳人になる」という理屈だった。校長先生に宣言すると、「廃人」と聞き間違えられて会話が混乱するというおまけ付きのスタートとなった。

仕事を辞めた夏井さんは、近くの公民館の句会に参加したが、自動的に句会を開催している結社に組み込まれたことを知った。しかも、入会してわずか数カ月のまだ経験も少ない中、結社の新人賞を授与されたことにおおにとまどった。

その後、結社と決別した夏井さんは、超結社で「純粋に俳句を楽しみたい。俳句を真剣に遊びたい」と、互選形式の通信制の句会、「十句会（とうくかい）」を始めた。当初は七人で始めた会だったが、次第に

口コミで購読者が増えて、七十名ほどに。毎月一人でワープロを打ち、編集や製本をしていた冊子も、最終的には四〇ページくらいのもとなった。

「十句会」で仲間と切磋琢磨していた頃、第八回「俳壇賞」受賞の知らせが飛び込んだ。「俳壇賞」は、日本における三大俳句総合誌の新人賞の一つ。「前からこの賞が欲しかった」という夏井さん。全国区の俳人として認められたことで、

超結社での活動も進んでいく、と感じたという。「十句会」は終刊したが、愛媛新聞での「四季録」の一年間の連載を担当するなど活動が広がっていた。

一九九五年に発刊された「子規新報」は、神格化された

子規ではなく、生身の子規の遊びの精神を具現化しようという俳誌。その編集に関わることとなり、企画として始めたのが、俳句とは無縁だった主婦をはじめとした俳句初心者たちを集めた「ミーハー吟行隊」だった。ふだん行かないような競輪場やスケート場などに吟行にでかける着想のユニークさと、自由で楽しい句会の雰囲気を活写した文章によって、一躍人気ページとなった。

そして、「子規新報」の創刊シンポジウムで生まれたのが、「句合わせ」形式の「俳句甲子園」構想だった。野球や漫画の甲子園があるように、俳都として全国的に名の通った松山で「俳句甲子園」を、という構想はそれ以前にもあったのだ

という。しかし、第一次同様に、この第二次「俳句甲子園」構想も頓挫してしまふ。これが、「俳句甲子園」実現のための草の根運動、学校向けの「句会ライブ」を始めるきっかけとなった。



夏井さんは子供の心をつかむ天才。その詩心を巧みに引き出す。

## 学校へ俳句の種まき

高校生対象の俳句甲子園を実現するためには、まずは、小学生や中学生から俳句の種まきをして、俳句の楽しさを広

めていこう、と学校へ出向くようになった夏井さん。

最初に受け入れてくれたのは私立の愛光中学校だった。その句会ライブの様子が「子規新報」に掲載。それを皮切りに、句会ライブが広がっていくようになった。

夏井さんの句会ライブは、若者たちが好むようにさまざまに味付けを工夫していて、とにかく意表をつけている。俳句の季語を当てる「季語あてゲーム」や、二つの句を並べて、どちらが著名な俳人の句かを当てる「俳人格付けゲーム」などが飛び出し、会場は沸きに沸く。

句会ライブのメインは、クラスのベストテンを決めていく討議だ。誰もが五分で一句を作る俳句の型を学んだ後、

五分で作った俳句の中から夏井さんが十句を選ぶ。クラス全員で十句を巡って意見が交わされた後、クラスの多数決によってベストテンが決まるのだ。ほんのちよっとした見方の違いや、言葉の使い方ひとつで、俳句の印象が変わることを、子どもたちは議論の中で体感していく。

こうして、一生懸命に考え、自分の意見を発表することで養われるのは、表現力だけではない。他者とのコミュニケーション能力がしぜんと磨かれていく。句会ライブを続けているうちに、夏井さんは、子どもたちが俳句を通して本音を漏らしていることに気がついた。



明るい笑い声が絶えない会場

「五分という短い時間で十七音にまとめあげようとするとき、自分の心の中を覗いてなにかを探すしかないでしょう。すると、初対面の人に明かすはずのない心の内側が、俳句となつて語られるんです。

私は最初、いかにうまく俳句を作るかを教えようとしてたんですが、思いがけない子どもたちの反応を見て、こり

やこんなことをしてる場合じゃない。もっともっと大切なものがここにはあったのだと気づきました」

また、第三者の感想という形をかりて、子どもたちは自分をどんどん語りだす。他者の語りを聴いて、自分の意見を真剣に返していく句会ライブでは、俳句を通してお互いの理解を進め、認め合っていく瞬間に出会えるのだといふ。はじめは、「俳句甲子園」のための草の根運動でしたが、今となつては私のライフワークとなりました。

念願の「俳句甲子園」は、平成十年に県内九校の出場校から始まったが、平成十三年の今年は、松山市の助成もあり、全国一都十四県から二十四校がやってくるまでになった。

## 三十代の集大成

夏井さんが、黒田杏子さんの「わが友夏井いつき第一句集『伊月集』に寄せて」と題した序文を得て、処女句集「伊月集」を出版したのは平成十一年である。

タイトルの「伊月集」は本名からとった。俳句を始めるとき、本名の漢字表記は、伊予の月のように、あまりに俳号らしく平仮名書きの「いつき」とした。由来は、名付け親になった祖父の愛人の名なんですけどね、と笑う。

月はいま濡れたる龍の匂ひせり  
日盛や漂流物のなかに櫛  
犬靴をくはへてゆける子規忌かな  
船籍はロシア積荷は花すみれ  
花びらを追ふ花びらを追ふ花びら

(伊月集より)

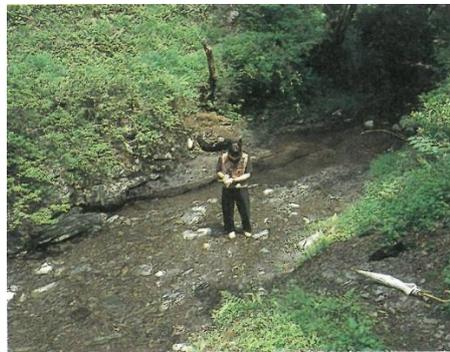
三十代までの集大成として編まれた句集は、読者を多様な光に包みたいいつきワールドに引き込む。

夏井さんは、この句集「伊月集」により、平成十二年度の第五回「中新田俳句大賞」を受賞。「新田俳句大賞」は、審査員の顔ぶれが、金子兜太をはじめとした錚々たる俳人だけでなく、宗左近など詩人も加えて魅力的な上、一年間に出版された句集から選ばれるため、自ら応募することはできない賞。チャンスも句集を出した時に限られる。

授賞式では、「夏井いつきに



くれてやった賞金は、無駄ではなかったと言っていただけのような活動や作品を残していきたい」と語った。



澄んだ水を見れば、その冷たさを感じるために、素足になって流れに入る。これも夏井流だ。

## ライバルは活性剤

「俳句はひらめきでもなんでもないんです。剣道や柔道と同じように、まず型を覚えればよい。あとは季語の現場に立つことですね。」

夏井さんは野山だけでなく、ありとあらゆる場所にでかけ、身体と心を解き放つ。五感を存分に喜ばせ、その現場で季

語と交信する。

「作品を痩せさせない」ためのトレーニングは欠かせないと、超人的なスケジュールの間隙をぬつてのゲリラ吟行や石田波郷の勉強会など、不断の努力も惜しまないが、なにより活性剤はライバルの存在。自身が講師を務める「ライバル俳人養成講座」は、ライバルたちと切磋琢磨するための講座だ。

「それぞれが好きなような距離で、それぞれの方法で俳句と楽しく遊び続けてもらえばいいんですよ」

夏井さんのいう遊びとは、心と身体を喜ばせてくれるもの。遊びも真剣にやらなきゃ面白くない、「楽しくなくちゃ俳句じゃない」と語った。